キョルオール叙事詩における人物類型の試み
――研究動向の整理とともに――

木谷　舞里

バルカン半島からアフガニスタンに至るまでの広汎な地域にまたがって伝承が残るキョルオール叙事詩（共和国トルコ語では Köroğlu destanı）は、カスピ海を分水嶺に大きく内容を異にする。その伝承内容の豊富さ、地域性などから多様な研究の可能性がありうるが、しかしながらその起源論や伝播の過程を中心に議論がなされているのが現状であり、内容に踏み込んだ研究はほとんどなされてこなかった。本報告ではまずカスピ海以西、アゼルバイジャンからアナトリアにかけての地域で語られてきた「西バージョン」のキョルオール叙事詩に関する研究動向と課題をまとめ、それを踏まえた上でキョルオールの人物像を類型化して分析し、一定とは言い難いその人物像の一端を明らかにすることを目的とする。なお、本報告では主な史料としてフランス国立図書館所蔵のオスマン語写本 Sadık Beg, *Kuroġlinâma*, Bibliotéque Nationale de France, Supplément Persan #994 の英訳本 Chodzko, A., tr., *Popular Poetry of Persia: Specimens of the Popular Poetry of Persia, Orally Collected and Translated with Philological and Historical Notes*, London, 1842 を使用する。

キョルオール叙事詩について多くの研究がなされてきたが、その多くが叙事詩の起源や地域ごとの多様性が生じた理由に着目している。

「西バージョン」のキョルオール叙事詩研究に先鞭をつけたズィヤ・ギョカルプやフアト・キョプリュリュらを中心とした「古代起源派」は、叙事詩中に見られる陽光信仰やモチーフなどからキョルオールの起源をギョク・テュルク（突厥）、あるいはそれ以前の時代に求めた。1946 年のボラタフによる研究以降、キョルオールを 16 世紀のジェラーリー諸反乱の頭目として実在する人物であると仮定する「ジェラーリー起源派」が現れ、ミュヒンメ台帳などの文書資料を用いた研究が盛んに行われるようになった。また、中央アジアに分布する「東バージョン」との比較の結果、中央アジアで形成された叙事詩がアナトリアに伝播して変容したと主張する「中央アジア起源派」も存在する。以上のように「西バージョン」のキョルオール叙事詩研究は起源論や起源論を補強する伝播の過程についての研究が中心であり、内容の研究については乏しいのが現状である。

叙事詩の中でキョルオールは多様な姿で描かれ、その人物像は一定しない。本報告ではその人物像を英雄、詩人、無頼という三つの観点から類型化し、分析を試みる。それぞれが持つ行動原理や常識、価値観などを複合した結果がキョルオールというひとつの人物像であり、叙事詩の聴衆がキョルオールに肯定的な評価と意味を与えた理由のひとつと考えられるのである。

キョルオールは非血縁集団の頭目であり、敵は商人や地方支配者などのムスリムである。同じ地域で形成された叙事詩である『デデ・コルクトの書』が英雄を社会の模範的人物として描く点と比べ、キョルオールの英雄としての立ち位置は特異なものである。

キョルオールは叙事詩の中で多くの歌を即興で歌い、自ら詩人に変装するなど詩人としての側面を有している。その特徴として、妨害してはいけない、歌と名声の結びつき、運命を左右する歌の存在がある。まず、キョルオールが歌を歌い終えるまで攻撃を留める敵の姿が何度も描かれ、敵に捕らわれた状況であっても歌を歌う。次にキョルオールは歌によって自身の名声を誇示し、彼の名声と歌が密接に結びついていることがうかがえる。そして彼の歌に感銘を受けた敵によって命を助けられたり、あるいは盗まれた馬を返してもらうなどキョルオールの運命が歌によって左右される。つまり彼は歌と不可分の存在であり、そのエピソードと密接に結びついているのである。

またキョルオールは自身をルーティーとして認識していることが描かれ、同時に独自の秩序を有している。さらにキョルオールが酒豪であることが一度ならず強調され、遠征先や本拠地の砦で大量の酒を飲む場面が多く描かれ、飲酒をタブー視していないことがわかる。つまり社会的規範を体現した人物ではないが、完全なる悪でもないという曖昧な立ち位置にあるといえよう。

また補足的な要素として、変装がある。キョルオールは街などの異なる共同体に赴く際に変装をし、衣裳を変えることで自身の素性を隠すことができる。つまり彼は街の人間にとって外界の存在であり、変装することによって共同体の一員とみなされうるのである。

本報告では英雄、詩人、無頼の三つの人物類型の内、詩人としてのキョルオールの特徴、無頼としてのキョルオールの特徴を中心に検討し、さらに変装によって異なる共同体へ立ち入ることができるという特徴を示した。

今後の課題として、本報告では十分活用できなかったオスマン語写本の分析を進めながら、英雄、詩人、無頼の三つの観点からキョルオールの人物類型に関する事例の収集と検討を行っていく必要がある。

（慶應義塾大学修士課程 2 年）